

続

徒然  
つれづれ

## 輸入食品すべて良か

桑野 巍

「いまごろ何を言っているんだ。大昔のことを持ち出して、時代に合わないよ。誰もお前の話なんか聞く耳を持っていないよ」との声が聞こえてきた。60年くらい前の話を高校の同窓生と話し合っていた時旧友の一人がそう言った。この歳になると昔話や自分の体験談を何となく話してみたくることが多いのだ。“終戦記念日”が巡ってくるからなのだろうか、高齢化のゆえか。

戦後すぐの旧制中学の教科書や授業の中身のこと、文具のこと、遊び用具のこと、食糧難のことなどがそれである。旧友から「よく覚えているなあ」と言われると、もっと話したくなるから不思議だ。太平洋戦争の終戦（昭和20年8月）を小学6年生で迎えた者たちの多くはいまやしょぼくれた高齢者になっており“毎日が日曜日”の生活だが、なぜか口だけは達者だ。だから余計に話したくなる。

小学校時代の私は晴れの日には藁草履、雨の日には裸足で通学していた。ゴム靴などなく、もし履いていたら非国民扱いにされた時代だった。小学校には水を貯めた足洗い場があった。運動場は生徒たちが小石を取り除いていたので、けがをする子供はいなかった。藁草履を作ってくれたのは母と祖母だった。少しでも長持ちさせようと麦わらに古い布切れを交ぜて編んだ草履が好評だった。その草履を一日で破ってしまうと、母たちは「よう運動したんじゃないなあ」といって目を細めてくれた。

農家は苗代、田植えから稲を育て、米を収穫するだけでなく稲藁を乾燥して二次利用する。藁は縄になり、箆になり、米俵になり、畳の底床になりで、昔の人たちのチエは有効活用の幅を広げていった。いま思えばリサイクルの原点かも知れない。しかも人に優しく地球に優しいのだから“エコ商品”で、環境問題の課題などほとんどない時代であったと思うが、稲藁の活用品はどれも暖か味があったように思う。

終戦直後の中学校教科書をご存じだろうか。いまの新聞の4ページ分か8ページ分をはさみで上手に切ってページを揃え、つなぎ合わせるといったお粗末なもの。紙質も悪く本の体をなしていなかった。

ただ容積が小さく軽いのが特徴だった。それでも生徒たちは誰一人として不満を表に出さなかった。中には兄や姉の古い教科書や参考書を持ってきて自慢気に見開いている生徒もいた。

都会からの疎開組や外地からの引き揚げ組が編入して、クラス（50人超）の3分の1くらいを占めていた。彼らは食糧難からか顔色が冴えておらず可哀想だった。地元出身組はほとんどが農家で食の心配はそれほどでもなかった。私の家は貧農だったが米麦、野菜、果物などは自家製で恵まれており、ひもじい思いはせず幸いだった。

疎開組や引き揚げ組の旧友たちからはいまになっても「お前は幸せ者だよ」と羨ましがられた。これには反論しないことにしているが「農家だったので…。田舎者だよ」とだけ言う。振り返ってみると、あの当時都会にラーメンやチョコレートがあったことを知らなかったのだから恥ずかしい。食の話題が進んで彼らから「マグロ、カニ、ウナギ、明太子が外圧で高くなるというが、どう思うか」と問題提起された。彼らは私の長広舌を知ったうえで「何か言わせてやろう」と思ったらしい。

これまで学校給食に反対したり、コンビニの出店を批判したりの天の邪鬼ぶりを見透かしての“水向け”であろう。食糧需給について日本の自給率は約40%、これをもっと高めるべきから始めた。だから海外からの食料品輸入は仕方ないがすべてを良としない。マグロ、カニ、ウナギ、明太子は食べなくても平気だ。贅沢品の輸入は極力抑えるべきだ。もう一つの問題は食品などの安全性で、国・自治体は独自の厳しい基準でチェックを重ね、悪質なものは品名、出荷者、取扱業者名などを即刻公表するべき、と声を高くした。

現代の平均的日本人は歴史的にみても、どの時代よりも贅沢な食事を楽しんでいると言われる。輸入食品について自分の考え方を押しつけることは避けたいが、珍しがり屋の平成貴族はこの際勇気をもって「欲望」にブレーキをかけたらどうか。

（自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長）